

町田敏暢((国研)国立環境研究所地球環境研究センター室長)、澤庸介(気象庁気象研究所海洋・地球化学研究部室長)、堀尾裕子(日本航空(株)コミュニケーション本部コーポレートブランド推進部部長)、伊田幸男((株)ジャムコ航空機整備事業部事業部長)、田中順二((公財)JAL財団常務理事)

概要

地球温暖化に適切に対応するために不可欠な大気中の温室効果ガスの濃度は、上空でのデータが極めて不足。JAL財団の呼びかけで環境研、気象研、JAL、ジャムコが地球規模の観測に乗り出す。独自の観測装置開発と運用で、世界をリードする観測プロジェクトを実施し世界上空における二酸化炭素濃度のデータ数が飛躍的に向上。

目的

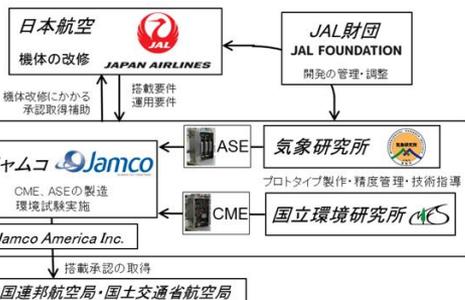
上空における観測はこれまでチャーター機によるもので頻度、範囲が限定であった。定期便を利用した定常的・世界的な観測を行うとともに、パリ協定の目標実施効果の確認等への応用によって、我が国のプレゼンスや国際評価向上にも寄与することを目指す。

内容

JAL財団の呼びかけでこれまで関わりのなかった機関が集結。財団が外部資金を獲得し、環境研、気象研が研究、ジャムコが測定機器開発、JALの旅客機で観測。装置に関わる2件の特許を出願し、世界初の観測システムを構築。世界最先端のデータの取得、解析に活かされる。

効果

2005年の運用開始以降19,000回超の飛行観測を実施。さらに2,800点以上の大気サンプルを採取し、メタンなどCO₂以外の温室効果ガス循環も明らかにする貴重なデータとなっている。データを利用した国際論文は54本など、国際的にも高い評価を得ている。



ココが、ポイント!

これまでにない観測方法を官民協力で実施。開発段階からこれまで関わりのなかった機関が連携。旅客機の定期便を使用することで定常的・世界的な観測を世界で初めて実現し、パリ協定、SDGs、地球環境の研究にも大きく貢献。